

911.3	八	天
-------	---	---

天
孫
寂
謐
詠

春秋算白雄著 拙堂老人補

誹諧寂禁

全三冊

江都製本所 英文藏

東山居士卯亥俳諧寂禁



うゝうゝうゝと推考するは

かゝれども思ふに拙書ハ

ゆゑに譬と云ふは

此の如くは、
（？）

（？）

（？）

（？）

（？）

（？）

（？）

（？）

家業とわかれしものなり

治るやいふも人々又わかれ

若くはいふに風なり

きこゆれは治るものなり

いふと云ふは人の心なり

いふと云ふは人の心なり

方と授けしものなり

いふと云ふは人の心なり

何事の世に事に入らぬ心
しるふにいとわづらひ
可成る友の心あはれとて論
しきと成るまはれとて

事と還る心

文化九年七月

富小路從二位刑部卿貞直卿

如渡齋主人

卷之八

王叔子

卷之六

かゝる國々にもあるやう人の
ちひさすくたしてなほ、
ちひさくも、
ちひさくも、
ちひさくも、
ちひさくも、
ちひさくも、
ちひさくも、
ちひさくも、
ちひさくも、
ちひさくも、

何れんやみねもいしつれをともあま
 思ふ心はえいひもあまふみねも
 一葉をわくはふみのしる著にけつ
 いふとはふみねふたれをともいふ
 正しに仙にふりつうんうたうい
 ふふそんはーおろけけけけけけ
 のーうきふめろろろろろろろろ
 めいふふふふふふふふふふふふ
 又けけけけけけけけけけけけ
 又けけけけけけけけけけけけ

序

可解不可解之一語不啻我詩
 之論可以論俳諧歌也夫俳諧
 之為歌僅二十一字為一首言簡
 意深宜哉其妙處在可解不可
 解之間焉白雄居士此撰解其
 可解不可解之妙處而得拙堂
 主人之增補其書初備矣今茲

壬申之夏刻成以予之與白雄氏
有舊請題數言時新聞小園
移花種竹日就園丁之事筆硯
癢者數旬聊書之以記姓名而已
江戸詩人詩伴老人大産行
序



凡例

一 此書安永選本寛政選本二品あり
安永本ふありて寛政本より文
あり寛政本ふありて安永本より文
あり今寛政本より参考は
く安永本よりある文を坊補するもの
もあらず

一 章中より補とあるもの以下を坊補也

又三行の文めをふのよ
補とあり一章増補でめい章名の
よと補とあり二章の増補
めを白と補とあり四章の増補
又章中補とありかく章名のよ
補とあり五章の増補はあ
死の

従来あるをめて改め
魚魯魚馬馬の誤りと
水のと

さきにも引出あるを引出の元
うりて悉く改むとありあ
人ふととぬ此のほや
有明の月鴨の長明とあり
兼好法師は改む解とあり
ととととととととととと
のよととととととととと
すと同

ととととととととととと

或人集よとあるも題名をさへふけり
あり

一 各章の初ふ祖傳の書とあると
西風の規矩と形と其の余の書と詞友
乃雅吟ありて後とあるとさうな
載と又鳥群の書とあると載と
なり撰者白雄とあるとさうな
形して白雄及び書と後とあると
のと予亦白雄と後と一とあると

一 世とあると門とあるとありとあると
その也故と篇尾と

世一書ハ祖傳の遺語をりやとし
去来史の筆のありを法撰しけと
る醉居士の夜話とあると二巻と
あり道とありあり詞友のつと
あり他見をさうあるといふと
争いをのうへさうあるといふと
おしはしとあるといふと禽獸とあると

そのうちあま

かゝのうた語あれとも能友のききん
そを公ふせんとあふあふ罪を予
宛して且増補を加へるを上梓と
著しあふうて正風の能世よる援の
くあふうた語あれとも予も亦減却せん
少年の人産業のひふある時を能世を
あふうた語あれともあふうた語あれとも
のあふうた語あれともあふうた語あれとも

古来の意をも傳へるこゝてあり
あふうた語あれともあふうた語あれとも
對してあふうた語あれともあふうた語あれとも
なり又老若隔なく強壯の助あり
故に能世をうた語あれともあふうた語あれとも
あふうた語あれともあふうた語あれとも

拙堂老人識

そのたうあま

かゝのうた語あんとも能友のうたんと
是を公よせんとあふた罪を予
強して且増補を加へるを上梓と
著しあふたて正風の能友よる據の
人あるや能てて予も亦減却せん
一 少年の人産業のひふある時を能友を
おき下し能友をたふさく多くを能友を
のえをせんと且年中のひふたふた

俳諧寂榮目錄

上の巻

泥濘の龜鑑

一丁ヲ

娑情の本

五丁ヲ

三の情の本

六丁ウ

俗情の本

八丁ヲ

詞情新古の本

九丁ヲ

換骨の本 反弱

十丁ウ

同業の本

十一丁ヲ



古今和歌集

「定」の字をうけてるを「定」の字にナ

文章をみずりの事ナ

文章をみずりてゐるの優をばなす事ナ

文章をみずりてゐるの優を

文章をみずりてゐるの優を

一句の繁をみずりてゐる事ナ

歌題をみずりてゐる事ナ

付の事ナ

火ともみずりてゐる事ナ

漢語はく事ナ

和歌の言をみずりてゐる事ナ

古事古語古歌古待ナ

名所をみずりてゐる事ナ

名所をみずりてゐる事ナ

名所をみずりてゐる事ナ

名所をみずりてゐる事ナ

名所をみずりてゐる事ナ

名所をみずりてゐる事ナ

けいふあやうなるの意

けいふあやうなる

世六丁ウ

名詞ふふふを詞出のり

世六丁ウ

神祇

世二丁ウ

釋教

世三丁ナ

憲

同ウ

旅

同ウ

祝

世二丁ナ

贈答

同ウ

餞別

世五丁ウ

留別

世六丁ナ

哀傷

同ウ

述懷

世九丁ナ

懷舊

同ウ

禹瀆

世一丁ウ

發句の体をもつ

ききこひあはれなる

世五丁ウ

そあやうなる

同

あきふくふふなる

世二丁ニ

あきふくふふなる

同

幾つかある

四十二ウ

出まある

同

色をうてのる

同

感懐ある

四十三ウ

観相

同

す影を對と既お

同

ふ紙をうてある

四十四ウ

一作ある

同

回文

四十五ウ

物の名

四十六ウ

中の巻

服の事

四十七ウ

才三の事

六丁ヲ

縣向他季うけまの事

九丁ヲ

二句一意の事

十一丁ヲ

おもひを乃事

十二丁ウ

名所より名所所る事

十三丁ヲ

志をふ所の事

十四丁ヲ

大勢の中の人をさへむる法

十五丁ヲ

さ保を月の事

同ウ

他の季の花短うの花振乃る

十七丁ヲ

あけるの事

十九丁ヲ

意句の事

十八丁ヲ

句々の事

十七丁ヲ

聯る二つの同理属乃事

十六丁ヲ

聯る諸語のあつた事

十五丁ヲ

聯る自他の事

十四丁ヲ

下乃卷

くはくはあつた事

其情の事

十三丁ヲ

廿二の事

同ウ

廿三の事

二丁ヲ

廿四の事

三丁ヲ

四時の雨

四丁ヲ

四時の月

同ウ

四時の風

五丁ヲ

廿五の事

其情の事

七丁ヲ

廿六の事

同ウ

廿七の事

八丁ヲ

廿八の事

九丁ヲ

廿九の事

十丁ヲ

三十の事

同ウ

三十一の事

同ウ

三十二の事

十一丁ヲ

三十三の事

十二丁ヲ

三十四の事

十三丁ヲ

三十五の事

同ウ

其十五一の自他のり
其十六其人の意せらるるのり
十五丁ラ
十六丁ウ

禁句の事
十九丁ラ

不易流行の事
同ウ

負外

十五の哉のり
其二十丁ラ

十五のや乃事
同九丁ラ

これとこれと水と水のり
同十三丁ラ

同録終

俳諧寂琴卷之上

白雄坊選著

拙堂増補

古池や蛙飛こむ水の音 翁

是のまゝの木槿も馬も喰をりり

この二つを蕉門の要領せつゝめてる人

おろひや雲を喰あて海苔の砂 翁

やこそぶぬぐももんを櫛のすぢ

身もももももももの一葉哉

あのをち稲はるゝまうたりふ家 翁

此秋を何ふ年ぐれやうとふ

やもかゝるゝややの北尾花

四時の親相けのう歯牙の味ひて心風の
音紙志るゝ

補

玄音法平曰古奇を見せり先抄をえり
あー我義理をとりてさうて義理あー
ゆめうたえそふ別さうと也長旋
得失をあてお教なるへー能惜も又さう
うぬう再三吟してさ義理あてさ
あー古今人の一致ふれハ終あうさう
のう心風の音をひてー只十七文さ

翁
齋
録
禁

うぬてのゝ解さう瓜うてさ人さうとて
味さうさうハ妙處さうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさう
捨るさうさうさうさうさうさうさう
あふあふさうさうさうさうさうさう
けさうさうさうさうさうさうさう
ふさうさうさうさうさうさうさう
なり中さうさうさうさうさうさう

まもやまうさうさうさうさう 翁

ほさうさうさうさうさうさうさう

白雲もさうさうさうさうさうさう

初さうさうさうさうさうさうさう

ありし水のうへに氷のありき
なりてあてて一ありて二の世の
或る理をなす落或る落をなす
名もはくはくしるやある人或日家
寂連の婿也寂連お奥へて大丈
入道の和歌の門弁ふあふとて
中さうれて曰くの仁未束の哥仙
見泰のなほ縁後おきつては
まきさこひも哥縁をあるは
んといひのやとて同くあてて感
中さきしとて也縁社の西へて
西風よりあふし西風をたたく
然乃実情を得るものありは
りりくゑあるやとて同くあてて
おきさきしとて也縁社の西へて
一以貫之とてある人ありは

のりなりとも也孝ともある忠とも
ある仁ともなり義ともありは
おきさきしとて也縁社の西へて
日かたも無きやとて同くあてて
まゆしを祖翁のれを看破しとて
実を妄をりて也縁社の西へて
老えしとてさきしとて也縁社の
の翁也躬恒貫之再いふとて
意なりあててはをわく天地乃
造化りやとてさきしとて也縁
一風なりとてさきしとて也縁
あふし祖翁のりあてたといひ
てとて其餘も邪説なりあて

蓬萊よりきりたて伊勢の初夜 翁

目のすきをさけふ縁のありき 其角

かゝるものゝてゑてゑたる中を固ま心を
まじり嘆きし詩も咨嗟咏嘆あり
歌の餘情あり純然たるふ十七言
はて嘆きしものや先きとある
句くもゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
すむあり二作と地をあるあり
歌の文章のやゑゑゑゑゑゑゑゑ
有信の俗のやゑゑゑゑゑゑゑ
とゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
あゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
つけゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
古哲曰あゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
と珠をゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
又曰よゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
あゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
人より上きとゑゑゑゑゑゑゑ

すゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
とゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
ともゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
あゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
むゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
祖翁曰人の旦暮あゑゑゑゑ
と秋をや秋をゑゑゑゑゑ
とゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
りの主一無適とゑゑゑゑ
三年不成の語をゑゑゑゑ

娑情の事

ひめゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
のちゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
情とゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
をゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

如し前後の端は由りなりの安んず
已る心とお合さるる時を一はむきいて
例の自らのたのしみとさへ
りの安んず已る心とお合さるる
時を一はむきいて
安んずをええさへ
安んず

高名を以て待つ哉 翁

唐のまゝよ人の顔える夕の如
一髪

かゝるべく、愛憎のあはれかゝる
るをきくべし

補

詩法要標云詩之義意不一要其

歸不過情与景而已情兼景者上也
偏到者次之

偏到しゝる情のそよぎる紙情にとりて是は
此の風情のといふ同一又婆のそよぎる紙景
到とて此の風情のといふ同一又婆のそよぎる紙景

到といふ景中寫情あり

又情中寓景景中寓情也

又云惟情可以全篇言然苟無法注之

易入流俗故曰融情於景物之中托思

於風雲之表者難之

を風婆とり

谷川や糸巻くく秋の暮 益 青

今栳竹小亭ありゆふ涼
栳居

三三三 風を志す風情の

向々次の章ふゆられ

三の情の事

余情を情をさうきふなり一む乃
ぐあもあう人余情の流係よき
あめり通情ををくよこりれを
ちやうは親の朋友の情をさうきふ
まめあのをちやうきふのあつた
あといはなきを情よあうきふ
るなり情をあうきふは己のまの
情をさうきふなり情をさうきふ
情をさうきふのまうきふ

補

情をさうきふはあうきふのまをさうきふ
はあうきふはあうきふのまをさうきふ
はあうきふはあうきふのまをさうきふ
はあうきふはあうきふのまをさうきふ

おもむきをさうきふ

枯枝ふからとのやあうきふの秋の暮 翁

寂しき情をさうきふ

秋をさうきふはあうきふのまをさうきふ
はあうきふはあうきふのまをさうきふ

寂しき情をさうきふ

海をさうきふはあうきふのまをさうきふ
はあうきふはあうきふのまをさうきふ

さうきふはあうきふのまをさうきふ

さうきふはあうきふのまをさうきふ

さうきふはあうきふのまをさうきふ

孫のき余情をふの

野きしをふ風のをむる 翁

於身掛念の行御をやりいさふい
時のるなりさふをてを情ふ
きく人腸をふあふ

秋つまの七日のあつ明やきた 猿 雖

ふちめの湯はあやふ人種の色 鼠 弾

中くふのをふみり人秋の暮 肅 山

朝鳥の種もふ人ふふふふ 和 及

こころのふくあて通情をふる

あをふふふふふふふふふふ
やもふふふふふふふふふふ
此方をふふふふふふふふふ

補

ふてふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふ
きふふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふふ

補 俗情の事

俗情といふきふふふふふふふ
か面を釈迦孔子をも奴僕のふふ
思ふ形をふてはふふふふふふ
のふふふふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふふふ

たのう唐皮羊ふきのものは也
のく口を以て言付しとも終る
俗情を吐出さるものなり

うらやみなりいさる時指のき 越人

去来抄云蕉翁伊賀よりけるを去来
曰ふは俗情なりの一さういふに
とあるなりかき風程なり
本情をあつていふなり
たふ人通情なりとも俗情をきらふ

「吾の国を人しゆをせよといふ
とたふをうらやみぬ」と

けふも俗情のしりあふなり

朝島を細くはさるはようなり

こころのうらやみなり

賽詩歌連俳とも思ひを述るものあり

けむいふいふあり十七歳のうらやみ
俗情をいふなり
小あつても竹窓三筆云榮名厚利ハ
世のうらやみなり
得へうらやみを思ふものなり
おめを得るものなり
あつて退くものなり
ある人なり
俗情をいふなり

補詞情新古のり

古有言云情を以新為先詞以舊可
用なり

補反轉

又

補

山雞映水那相得
孤鸞照鏡不成雙
天下莫成長會合
無勝比翼兩鴛鴦

萬の海ふのりてんせりなをみね
公卿

高木急の事を又せよ 風乃狀 許六

去來曰同業のゐるを

挿の通やまゐて啼かむ懐悴 昌房

石之入于水也
居行

ところへいふをりなりけり
 鳴やと申す親は旧意なり
 けいふするすてあては
 旧業とも又同業ともいふ
 けいふするすてあては

志々々々席を八席と夕方船 宗次

けを自の心とて、
のけさぬり、
出さるることを他より見て別ふ
魂を入きて、

人酔く較ふくよの寐るや柴居

かくいへ形容を同じふるも自他の
のちちみてもいへ天地體隔形はい
同業互涉の類をすめりといふなり

補一字の急をうゝとく勿急浅深の事

祖翁曰一箇ワラ、のりナセヌはあり
一箇もあらそくし、あくるあくるま
佛性もさう、このふれあの一佛、なる
る、いふまじりの有るや、よはゆるへ、とて

1

公同

こそ一句の意を解きさるるか
入集せしものなむむ人も年よんと
いささる時を風船の移るを生く

夕燒の孤村に歸る秋の暮 保吉

或曰此乃孤村ふゆれといふるなりと云ふ
ききと云ふありしなり是亦一なるを解
する人なるゆれと下知をなすなりと云ふ
秋の暮の寂は寒くともさるるを換ふ
あり一なるをも會せしめてはふふと
所を數かきと云ふなりと云ふ
と云ふなりと云ふなりと云ふ

光風霽月の如く後の夕々ゆふあや
りのめく眼あけの幽境古和清音あり
是一字もむさとしをゆるぐとるゑ乃
は深よかゝるものゑまゝとてをわかく
一るをわたくしとてあふ禁といふも義理を
なすゝ意を添へてんうゑに義理なく
通へる意添へたる中ふつゝとて
るあふ禁みのうゝそ内よそちりりて
阿里何れを別より外より求えんや

文字あはれ事

天下風暴氣々々鹽水と云々状哉翁

蒲之英やまといぬ者のいしる草 山 店

有海の波をかきつけてかろく海人の

吟とくくくき字あゆみ風流の
うの病をそと切字はくしめて文字
あやういさあといふめやみう

月やあやえ菊や

この文章のゆゑをきく

月
経
子

莉
やあをえ

かゝりふとて言ふ事なりはなはた
小にたすことゝしてけるあは
連歌と三三の字あかりなり
二回の字あかりを廻るゝも二回の
字あかりにては保のほはさうなり
と

補

二四の文章ありと云

雲^ニを^四く人を休む月見哉翁

二
三
早きよりく、意中ぬさるの由の色
吞
霞

三三の文字あり

三
う
ち
ろ
ひ
は
な
ま
の
圃
を
傘
下

ちみ^三く^三酔のさるる夕櫓
自櫓

古人のまゝ二四と電をたてると二曲
あつて一語ありやん、古人あつてもこれ
下りなりと祖肩のさういふ

文字をあるて句の儘に付する

あゝなやもねまのわさそ河豚汁 翁

まじくは嵐の空めし鳴るるぬ 嵐雪

鳴るるありてきおのさるめし
感落しあつて鳴ける懐梓の人ぬ鳴
ゆるめし鳴るの吟ふるあそびる人

くくくくくくくくくくくくくくくく
このくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく

一句の禁さすい形あるや

朝よふはたきお島のかいあり 公羽

お島行脚を思ひきりあふいりりり
風鈴の情實中をきりりりりりりり

きりりりりりりりりりりりりりりり

あふはし新島人の醒さるる 嵐雪

越人へ挨拶のりりりりりりりりり

そめめめめめめめめめめめめめめめ
新島の鶴とていふさるりりりりりりり
ゆるりりりりりりりりりりりりりり
ゆりりりりりりりりりりりりりりり
ゆりりりりりりりりりりりりりりり

歌題他諸題の事

補

歌題とて歌め他新島ゆきる歌を
いふあり他新島とて他新島かきりりり
題たりりりり

神也おもひもかきし涅槃の像翁

綿
ぬき
も
松
金
夢
々
以
て
終
る
野
水

角觥
とら
とら
とら
也
秋の
唐錦
嵐
雪

曉の筑波もろくも念佛 其角

[illegible]

乃持折翁

黄くや餅ふ糞する掬の先

江上舟中又見林下
 曲

五月乃也 硯 采 系 款 菜 椒 嵐 雪

かたきとぬきそへて 葉や秋の風
杉 風

志
 立
 衣
 掃
 子
 金
 一
 乃
 の
 の
 志

應くといふやうなるを門
去来

以く中より花時をかきぬ 萩田の橋 大草

是等々歌歌なり 能力はよくても
老うふへーかんいふ云葉をもてし海
歌とて甘きえをとりて 能力とてさうあふ
歌とて 能力とて 別はせしあふあふ
福とて 能力とて 能力をけういふ
とてとていふとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとて

蝸牛角子口須廣石翁

以のちときをて野寺の鏡哉
工迪

郊外をいけ尾の池の加茂端 其角

義仲の妹の山を秋（出）翁

補
祖翁より景清より花見の舟めり七々流
とて人向あまは是と延実天和の以の
流よりめり西風より用ひて心んらるる
貞享ののり元禄よりする貞享の元禄の

今もかゝる誦めきせらるるをいふし
却て延宝とておのひめい西金のおお
おすくまゝいふ

補 火を水にいゝあき事

清補うゑ候おろし候はる火を水にあき
いふおまゝといふおまゝの火を水にあき
おえちういふおまゝの火を水にあき
おのまゝの火を水にあき
おのまゝの火を水にあき
おのまゝの火を水にあき
おのまゝの火を水にあき

蛇 吟ふときけいおまゝの声 翁

かゝるおまゝの火を水にあき
支考

是あき火を水にあき
おまゝの火を水にあき

吟ふときけいおまゝの火を水にあき
おまゝの火を水にあき

これらも同じ難いおまゝ

白雄曰火を水にあき
一語をいふおまゝの火を水にあき
おまゝの火を水にあき

漢語をいふ事

馬をいふ残夢月達し茶の煙 翁

おまゝの中山の吟あり

杜鰲鳴也湖のうさく濁る 大草

好くしてせうとりのあをあらと残る
湖のうさくは漢語のゆへに風ゆを
落る花鴨牛の夜をあらはるあり
元日 灌佛 名月 蠟八 寒食
うさくの題のうさくは漢語あり

補蝶葉

うさくはうさくはうさくはうさくは
和歌者流のうさくは漢語ゆへ
うさくは漢語のうさくはうさくは
あり

名月也湖のうさくは七小町 翁

順禮のうさくはうさくは 嵐雪

一向のうさくはうさくはうさくは
あり

和歌のうさくはうさくは

紙さぬのぬるもねん雨の花 翁

袖のうさくはうさくは 素堂

先づうさくはうさくはうさくは
あり
うさくはうさくはうさくは
あり
うさくはうさくはうさくは
あり

和歌のよきあそびは世のよきあそびなり
ふらふとまじくこれ日の下のよきあそび
なりやうくもあしそかの俗なりと
へうへう

補

りやうりもほのくとほじ柿の葉 貞徳

ふらふとまじくこれ日の下のよきあそび
なりやうくもあしそかの俗なりと

朕や世を何一変の山かせと 春鴻

ふらふとまじくこれ日の下のよきあそび

古事古語古歌古詩あつたのうた白法

知足軒新居の賀

ふらふとまじくこれ日の下のよきあそび 翁

淮南子説林云

大厦成而燕雀相賀

さういふ花のあつたの賀あつた

撰集抄云中勢元輔翁の哥二首あり
すふとまじくこれ日の下のよきあそび
なりやうくもあしそかの俗なりと

あつちのふりばをたつちの秋の風 翁

明詩選

秋風吹將暮 古道行人稀
登此微陽色 射我霜中衣

石のしやき門あきそ夕ぐす 牡年

源氏常其の巻より
ちつと川のわきわきさうのそ
みきへあそびてしすのうらやま
わきわきと鮎の魚あり

春中りやうねの雀の顔けさ 一髪

清女枕草紙
を雲の顔つさいてうらやま
飛あそびてしすのうらやま

青い海や羽白き鴨赤かへ 忠知

古依日記

くらとこのお糸をふそく
名をまきおめいり
波をまきおめいり
ふねと五色のうらやま
わきわきと

えりやう鳥のきけを数い 其角

古今集

あつちのふりばをたつちの秋の風

James R. Davis 1860

此後之世也 何

此後諸君

自 己 的 心 意 是 否 能 夠 實 現

Handwritten notes in Chinese script, likely bleed-through from the reverse side of the page.

此後、世に可成の事

At 10 AM I am going to the bank

下等之品也

木母字之會可之角

[illegible]

Handwritten signature

けさるる小堀の庭をぬらにす 翁

吟はすやもとの匂いの捨るの 岱水

ほりぬる誠の友人を頼みむ 素牛

うさるるも思ひあふるを牛さるるをかりを
所よふまじきまじき名ふのうあふるを
あふる必思ひあふるを牛さるるをかりを
古堀の匂くをかりを牛さるるをかりを
て思ふのうをかりを牛さるるをかりを
なり
古人曰ふは海をのひとすれどもさるる
さるる人さるる川のさるるさるるのさるる
ゆさるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるる

ひまは近江の人と知りき 翁

補

猿蓑集云望湖水惜春とてさるる
あり或はさるる送別とてさるるあり
一時の誤りありありありありありありあり
さるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるる

五月のふゆの浮るをんす 公羽

と丹きの川にさるるさるるの月 八

神をさるるさるるさるるさるる

あふさるる細代の水魚をさるる

出さん

八島みき

海人かたはしをいふも海に 千回

伏見の舟船

あふのうらやみ落かふを夜哉 路通

まのぼろ

はるのうらや鬼ころもひと原 雉舟

瀬川みき

我弱の留あふ人橋の雪 湖春

是のうらやみ落かふを夜哉

あふのうらやみ落かふを夜哉
うらやみ落かふを夜哉
一法ありて他を名あふすをこれに
まのぼろ

名新ふのうらや古歌或古きを思ひ

あふのうらや

蝶みきふのうらや風を 公前

あふのうらやみ落かふを夜哉
うらやみ落かふを夜哉
西行の涙をまのぼろの増賀の信を感
まのぼろ

うらやみ落かふを夜哉

秋九

ふみづの軍あはれしや野山 支考

ひそくしりし名あつた難のうけあふん
あふまふる中へ美りきこむる秋
きく向中へさひし自然に秋たふぬ
かうしりし一むるのきこむるゆめ
ひそくしりしむいしすきさうり

補てしあひりて句のきをほくするなり

いふをふたうとふあふり
せぬあふたふりふぬふ
のきりてはる

るふあふぬきもあふいふ嵐の葉 公利

あふまふる酒屋ふたふて

文君のあふきも酔のすに
あふりしあふいふるあふ

酒部あふりあふのきもあふあふむ 惟然

あふりしあふいふるあふ

あふりしあふいふるあふ 越人

あふりしあふいふるあふ 去来田園集の二作の句とていひあふ

あふりしあふいふるあふ せりしあふいふるあふ

あふりしあふいふるあふ 接しあふいふるあふ

あふりしあふいふるあふ 作あふいふるあふ

あふりしあふいふるあふ ちのあふいふるあふ

其の罪をみんてそ人を悪あふ

秋の月 白雄

秋の月をいふ人おほく惜の月

あ國の橋めを郭とて

あ國の橋めを郭とて

かくていふも常にも同じくをいふ
文の中へ書へうすは白の紙を
味いあるへ

補名新のそとて洞と乃事

山崑崙をきくゆのて蓬萊
方ふと仙の地とすのあり
士と地を捨てて茶をいふ
日月のたふりてをいふ
うすむうのふはるまゝ
美景と十景と詩人もを
つゝと方士文人も言ふ
中うち画子の筆を捨てて
名は劉姑射の山の外人
有てふと繪をいふ

ほと秋の斬是時十景をいふと 公羽

山中の温泉めそのいふあり

白雲峰とて山後のふたふた

ちんちん西よすめを伐る音
東よむくは院くの鈴の音
あまの底よこころ寒き雪
繡衣いづれ白きとひきせ

高麗の城のそとよりしむ山 其角

うしむ山の吹あり

救世大士をぬくをそりて
勾欄を背あふみかりに寛
ぬるちしねをそのきむり
山みろりの風をりのけり
梵ちきよきとく樹色を
ぬくくくくくくくくくく
をぬくくくくくくくくく
鈴の音はくくくくくく

ゆききききききききき
不降の地なるくくく

新橋のく大親ききのくくく 白雄

初瀬の吟たりき

初瀬の吟の細き許六の風俗文選
を藝文とてくくくくくく
虚はあそく虚を書きぬく文飾
ゆききききききききき
中の俗言辭言の文をきき
初瀬の吟のくくくくくく
ゆききききききききき
終合せくくくくくく
をくくくくくくくく

多八志とて 上 三

神祇

ふさふさの皆やめいぬは遷宮 翁

梅つや湯ふその枕の若のまき 大草

昔の昔も和光の塵のまき 許六

他流よつふ五音連声等のるる風
けふの細さーふけささるるをふ
ふーたさる

森清ー^死ぬきさ

梅つものや^鏡今おも

ふの類い神祇も納のまきさる

釋教

畢旦暮昏曉の吟皆けうのなる
も納よあさるるあ神祇もさるる

観^まの夢えさるる花の雲 公頼

ふあじもむのくもはるる哉 般木貞

法然上人五百年来忌

以て代ふやふ一ねの法のみ 露沾

寺のゆきあふさるる外ねと回く
はささるるをさるるあさるるの釈教
の句は其の用なり

窓

紅梅也えぬ意けぬ玉の簾 翁

秋ひとて冬に極まりて春ぬあけ 荷兮

虫居の月より枕もあけ 文洞

あけの月とて秋あけとて
歌うとて歌歌あけとて
自のあけもあけとて
何とてあけとてあけとて

旅

旅より脱てりるふ肩のぬ更衣 翁

草はくちと草うり人時同む 山川

その草は推さるりてあけとて 大草

旅中の人とあけとてあけとて
とてあけとてあけとて
旅のあけとて

税

先程く梅を人のあけとて 翁

馬を拝願り人へ

時よし肥る馬より秋とて 酒堂

其の南も秋宅め

世あけとてあけとてあけとて 涼菟

祝の句をきく自他祝詞をいふ人
あり

贈答

醫師はうしろりやめて

系揃ういろきの花をうら
翁

暖く春を掃めて二人

夏薨也日ごとく麻のふかひ
曾良

夏薨也物もよる由も名所哉
元兆

縁のりてあふりていそ

けうへそみ親等も風をあら
助叟

同人をうら

為眠るも木ぬるやそひ瓶
言水

葦舎より菊をゆき

みりうみねうさか人を月夜
土芳

りゝあふりて六時を叫ぶ
斜影

あふりて龍馬や校舎をさそ中
如行

或るは同士の

いふりてさるはほし炭を
木因

みづの口客をりてふと
君えよやふいづる花莖の桶 嵐雪

務名の句を自他親疎をよきくすし

餞別

撥のふあふと身を流田の美 翁

翁の首途をぬくる

如頼檀山志くきふふ日を預ひより 由之

友なる孤金を送る

雲をぬやういふくしむぬ通る 野坡

饒名の句を自他親疎をワきすふふ

留別

川崎めと人くはつるふ

去るの跡をちくふはむ別をい 公羽

ふふをくくぬり

思ひまうふ都の秋をくくるは 素堂

途中あふ翁別をなると

行くもきりきりなまともな秋の空 曾良

留別の句む自他我縁をいふこと

哀傷

門人嵐園の此中より

秋風の折るかゆき素木の杖 公羽

其の角々母をりしあひ

郊のむもろく形さや春をすんずけ

公羽のこころを

何ものもなきふさふさの菴 槐市

あはれなるも膝をかへてふさふさ 野坡

公羽のこころを

雨さかしくぬるや枯尾を 其角

雨のさかしくぬるや枯尾を

夢さかしくぬるや枯尾を 北枝

夢さかしくぬるや枯尾を

夢さかしくぬるや枯尾を 其角

妻あはれこころのこころ

水も月の相のひさしくも

野水

ふりやみこころ

水も顔のあはれ出て人むと

落格

あはれにこそをひらむ

さゆなるやもを飯ふ秋の

尚白

おののさききり

ふふおの月もふふの月も

去来

ふふふふふふふふふふ

野水

病もきこふかひさしくも

あはれこころ

野もふふふふふふふふ

史邦

あはれこころ

思ひあはれ秋のふふふふ

鬼貫

追悼

ふふふふふふふふふふ

あはれこころ

あはれこころ

許六

母の年回し

たふふうけうくさる花さうね

其角

なたる工齋の面をう
くさる葉をうさうりて

二人のきみさうとあふの風

病のさなういふあやう
お見せさうな恨ももさう
さうりて

きみ人の志くけいさうさう下

元翠

哀傷の句を自他親疎を言さう
親疎各感ふ別哀傷さうて人

對しつゝ白りたる人句いづつ
さうあうさうりて

けい代き涙あふえ春乃鶯

かゝりさうさうさう人をさうりて

鶯さうもさう涙あふえさうの風

さういふさうさうさうさう
さう別なりさう舊門のさうさう
さう通さうりて

述懷

さうもさう旅屋の果も秋の金 菊

さうさうさうさうさうの秋 八橋

葉かゝるをてんも新魚の浮世
野坡

懷舊

高館の古戦場あり

夏草や兵やもう夢の跡
石

雨の降るいゝ屋の跡あり

いゝと竹山獨洗ひて流るる
曲翠

夢を夢よりとく

草のまをぬじい人の乳房が
風洗

画
言

穀骨の画

稻けりや春のやと流るる穂
翁

源氏の画

傘持の月よみとてはあつた
其角

花女の絵

よのかみとてゐる花の月
鬼貫

布袋の画

大虚宗一禅師の指のこゝ所
其角

人聲の繪

月夜の鏡をまわつてはくさくさ

才磨

儼ハ他の句よりつゝるあり

あゝのときつゝの静けさのさ

其の角の句を何ういふかはあはれと
おせり自のるありていくと儼なるさ
笠重呉天雪といふは儼を及轉の
句なりを角のころかゝる儼

又かゝる儼

あゝのやうな儼の語にかし

あゝのやうな儼の語にかし

つゝのさやうな儼の語にかし
多しとそは花門のゆゑなり詩は有聲の
画もそは声の待りなり古人のそは
なり故は儼をそは画の餘情をいふ

青い色をさする春の色

素堂

つゝのさやうな儼の語にかし

公翁

さかぬ桐のひとさやうな儼の語にかし

其角

さかぬ桐のひとさやうな儼の語にかし
さかぬ桐のひとさやうな儼の語にかし

補

或人枯木は鳥のさかぬ桐のひとさやうな儼の語にかし
のさかぬ桐のひとさやうな儼の語にかし

老るがゝる花をもち人ふ秋の暮

白雄

幾句の体をもつての

花をもち人ふ秋の暮

花の香を清くしよめる浅き花

公羽

うつくしき花を清くしよめる浅き花

去来

花の香を清くしよめる浅き花

沾蓬

花の香を清くしよめる浅き花

花の香を清くしよめる浅き花

公羽

花の香を清くしよめる浅き花

其角

花の香を清くしよめる浅き花

桃賀

花の香を清くしよめる浅き花

花の香を清くしよめる浅き花

公羽

花の香を清くしよめる浅き花

去来

花の香を清くしよめる浅き花

杉風

花の香を清くしよめる浅き花

花の香を清くしよめる浅き花

公羽

花の香を清くしよめる浅き花

露沾

花の香を清くしよめる浅き花

大草

艶々たる句

めきてゆく人もぬしやふの秋

公羽

蜀錦をふくむる衣はきと

菊齡

花うきやひさしくよるの秋

支考

幽玄なる句

秋の木の葉ともぞもふいふ秋

翁

やうして秋の心はふむふ

山川

名月や新とてのふふふ

昌房

秋の心

初生の葉をみても人輪あやせん

公羽

秋の心は花の心人乃長刀

去来

黄鵠も二羽五合の秋年首

曲翠

秋の心は色もあやめ

秋入

秋の心やうき柳の心いほし

公羽

身ぬるいよき秋の秋の秋

轍士

秋の心やうき柳の心いほし

塵生

感情なる句

酒の心は秋の心

公羽

いし毎あけ掃のきふにぬふたうのふあ
ほくしつと終るふる秋のふゆは 小春

觀相

首のふふの表へききり今秋のふ
ふふもむつうきなるを相哉 木節
何となく地をふふふの表也 越人
はふふふと對と観お 曲
ふふふとふふふとふふふ 翁
矢のふふふの表をのふふふ 志

炉をきくふふふはきし措の儀 似草

ふふふとふふふのふふふ

ふふふとふふふのふふふ 公羽

較ふふふふのふふふ 其角

相ふふふのふふふとふふふ 不角

又

瀧のふふふとふふふのふふ 公羽
垂ふふと猫のふふと周果經 西吟
監人のふふふとふふふのふふ 来山

又

きよきものこやききねき時の繪のまきい

公羽

ちりきりや女さの紙の板の色

鷺水

かきくろの板や繪への百人一首

許六

又

艸のちりねきりて襦袢の板や洞

公羽

ふゆはさふはふい蓮風情さうえ

素堂

るゑい山の板よけふ花のまきらむ

楊水

一作ある句

床より扇を軒ふいてもききくま

公羽

馬きりる扇も板のありし哉

曲翠

そえきりて紙襦をたづねるまきり

荷分

くまの句くまを侍恵くワ、何や
りとも皆りくめさるあまううさう
きり人曰一作きりあまううさうさ
りあふのきりてあまのきりてあ
ひあきさきりてあまのきりてあ
句くまをたづねるまきりあまう
きりてあまのきりてあまのきり

田文

田文
五

はらの木のきやまを朝のけむり
 ねじけ波白くまはけしれ
 氷花

物の名

うけりし時貝やまをけし
 菊峰

鴨くさくさるる葉に水のかき
 立吟

圓文物の名好むをさるるあはれ
 かゝのこゝろあはれをいひさるるのあはれ
 あはれをいひさるるのあはれをいひさるるのあはれ

うけりし時貝やまをけし
 あはれをいひさるるのあはれをいひさるるのあはれ



能諧寂禁卷之上終



Vertical handwritten text in the left margin of the right page, possibly a library or collection number.



Vertical text on the right edge of the right page, likely a page or volume number.

